

令和 5 年 5 月 17 日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2022

課題番号：21K19963

研究課題名（和文）自己規定の円環構造に基づく「自我」の究明 カント、フィヒテを中心に

研究課題名（英文）Examination of the I based on the Cyclic Structure of Self-determination, with reference to Kant and Fichte

研究代表者

尾崎 賛美 (OZAKI, Sambi)

早稲田大学・文学大学院・助手

研究者番号：60905868

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000 円

研究成果の概要（和文）：報告者は「自己規定の円環構造」という枠組みから、カントとフィヒテとの自我論を連関させる包括的な研究を行った。報告者はまず、自我と自我ならざるものとの相互規定的な連関構造をもって成立する自己規定的事態を、理論的文脈と実践的文脈とでそれぞれ明らかにした。その上で、これらふたつの文脈における自己規定的事態がさらに相互に（あたかも円を描くように）形成する「円環構造」に着目し、こうした連関構造を形成する働きという観点から「自我」概念の内実を究明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

カントやフィヒテに限らず、哲学的枠組みに定位した自我論研究は、しばしば難解で抽象的な議論という印象を与える。それに対し、「自己規定の円環構造」という観点からアプローチした本研究は、「自我」概念の内実を、我々の現実的な意識との連関において捉え、再構成することに重きを置く。

したがって、本研究の成果は、純粹で根源的な原理として「自我」を論じる傾向にあった従来のカントやフィヒテの自我論研究と比しても、より包括的な文脈から「自我」の内実に光を当てた点で、独自の意義をもつと評価できる。また「自我」や「意識」研究としても、哲学的な枠組みに限定されず、他の学問分野との接合可能性を秘めたものであると言える。

研究成果の概要（英文）： The researcher conducted a comprehensive study linking Kant and Fichte's theories of the I within the framework of the "cyclic structure of self-determination."

Firstly, the researcher elucidated the self-determination that arise through the interdependent relationship between the I and the non-I in both theoretical and practical contexts. Building upon this, the researcher focused on the "cyclic structure" in which these self-determinations mutually form (as if drawing a circle), and investigated the nature of the concept of "I" from the perspective of the functions that create such interrelated structures.

研究分野：近代ドイツ哲学に定位した自我論研究

キーワード：イマヌエル・カント ヨハン・ゴットリーブ・フィヒテ 自我論 自己規定

1. 研究開始当初の背景

本研究課題において報告者が構想したのは、イマヌエル・カント（1724-1804）および、ヨハン・ゴットリーブ・フィヒテ（1762-1814）に定位し、これまで取り組んできた自我論研究を、「自己規定 Selbstbestimmung の円環構造」という報告者独自の観点から統合することである。カントやフィヒテにおいて「自我 das Ich」は中心的な概念として位置づけられており、両思想家の自我論の双方に光を当てた包括的な研究も、これまで数多く行われてきた。しかし、報告者は以下 4 つの観点から、従来の研究において、カントやフィヒテの自我論がまだまだ十分に論じられていないと判断し、本研究課題の構想に至った。

（1）従来の研究においては、カントに関していえば、「超越論的統覚 transzendente Apperzeption」に着眼した「自己意識 Selbstbewußtsein」論研究が主たるものであり、この傾向は現在でも根強い。他方、フィヒテに関しては、依然として「絶対我 das absolute Ich」の「自己定立 Selbstsetzung」ないし「事行 Tathandlung」が主題化される傾向にあり、〈フィヒテの自我論＝『全知識学の基礎』（1794/95、以下『基礎』と略記）の第一根本命題〉という限定的な解釈が優勢であるように思われる。つまり、『純粹理性批判』第二版（1787）で論じられる（理論的）「自己認識 Selbsterkenntnis」や、『基礎』の第三根本命題で導出される「可分的 teilbar 自我」の定立など、〈自我と自我ならざるものとの相互規定的な連関構造〉として成立する、現実的な意識のレベルをも射程に収めた自我論研究は、これまで主題的に取り組まれてこなかった。

（2）カント、フィヒテのいずれの自我論研究においても、〈理論的文脈における自我〉という解釈の傾向が強く、実践的な文脈において自我を論じる研究は（特にカントの場合）ほとんど展開されていない。

（3）カントからの強い影響を受け、哲学史の表舞台に登場したイェナ期（1792-1799）のフィヒテとカントとのあいだには、こうした影響関係から推察されるような表層上の〈近さ〉に加え、思想的な〈遠さ〉をも含んだ一種の緊張関係があった。しかし（1）でも示した、〈カントの自己意識論〉と〈フィヒテの自己定立論〉という観点からのみ比較考察を行う従来の研究では、文脈上の〈近さ〉や、術語の使用における〈遠さ〉といった、あくまでも部分的な関係性のみ焦点が当てられてきたと評価せざるを得ない。

（4）往々にして超越論的な議論に限定して取り組まれてきたカントやフィヒテの自我論は、我々の現実的な生から分断された抽象的な思想という印象を与えるきらいがある。しかし、彼らの自我論は、理論と実践との両哲学的文脈から、自我ならざるものとの関係の内に構築される現実的な意識との連関で自我を捉える議論として考察されてこそ、その真価を現すはずである。

2. 研究の目的

報告者はここまで示した 4 つの観点を背景に、「自己規定の円環構造」という枠組みに定位し、より包括的な観点からカントとフィヒテとの自我論の連関を捉え、論じる試みを構想した。この自己規定的事態は、自我と自我ならざるものとの相互規定的な連関構造を内実にして成立する現実的な意識の事態である。こうした事態は、具体的には、カントにおいては「自己認識」の事態、フィヒテにおいては「可分的自我」の事態として論じられる。これらは、超越論的な根本原理として据えられる「自己意識」（「超越論的統覚」）や、「自己定立」（「絶対我」）に焦点が当てられる傾向にあった従来の研究では陰に隠れたテーマであり、主題的に論じられることはほとんどなかった。それに対し報告者は、理論と実践とのふたつの哲学的文脈において成立する自己規定的事態を明らかにするとともに、このふたつの文脈における自己規定がさらに相互に（あたかも円を描くようにして）〈円環構造〉を形成する点に着目した。また最終的な目的としては、こうした〈円環構造〉を形成する力動的な働きという観点から「自我」概念の内実を捉え出し、「自我」をこうした力動的な本性において論じる点において、カントとフィヒテとの自我論の接合点を示すことを企図した。

3. 研究の方法

本研究課題の期間中は、フィヒテの議論を中心に取上げた。2021 年度は、報告者が着目する自己規定的事態と、イェナ期のフィヒテの思想の超越論的原理として機能する「自我（絶対我）」との連関を見定めるべく、先述の『基礎』をメインテキストとし、その中で論じられる「障害 Anstoß」概念に着目した。

2022 年度は、これまで取り組んできた「自己規定の円環構造」を構成する各要素を包括的に連関づけるべく、この円環構造を根拠づける概念として「絶対我」概念に着目した。「絶対我」

は「障害」概念と同様、主に『基礎』で主題的に扱われるものであるが、この概念の内実と意義とを分析するために、『知識学への第二序論』（1797）をはじめとするイェナ期の諸テクストを体系的に検討した。

4. 研究成果

(1) 2021 年度：「障害」概念研究

2021 年度は、ヨハン・ゴットリーブ・フィヒテが『全知識学の基礎』（1794/95）のなかで論じた「障害 Anstoß」概念の内実を研究対象とした。報告者は、これまでの一連の研究を通じて、イマヌエル・カントならびにフィヒテの思想に即した「自我」論の研究を構想しているが、当「障害」概念研究はフィヒテにおける自我論研究の一部にあたる。フィヒテにおける自我概念の特徴として、自我という概念の指す内実を動的な事態として捉え出そうとする点が重要であるが、この動的なあり方の一側面として、理論ならびに実践という二つの文脈において、〈自己自身を規定する働き〉として自我の働きが具体的に論じられる。こうした自己規定の働きを通じて、我々の経験的自己（の意識）が形成されるが、これは自我の働きが単独で遂行するものではなく、つねに自己ならざるものとの相互規定的な関係の内で行われる。この自己ならざるものの契機として論じられるのが上述した「障害」である。これは、自我にとってはどこまでも未知なる「非我」が自我に対し現れる仕方として論じられるが、重要なのは、こうした「障害」が何らか具体的な対象として現れるのではなく、自我に対し「自己自身を限局せよ」という「課題」として現れるとフィヒテが論じる点である。たとえば Breazeale（*Thinking Through the Wissenschaftslehre*: 2013）は、「障害」という概念の使用における歴史的背景に着目し、「障害」概念の内実を、自我の活動性に対する〈阻止〉という側面と、自我の自己規定への〈促し〉との、二つの側面を分析し検討している。それに対し報告者は、「障害」が自我に対してもたらす上述の「課題」の内実を検討し、この課題が果たす機能の二つの側面を詳細に分析することから、フィヒテにおける「障害」概念のもつ意義、および「障害」概念が自我の自己規定とどのように関係するのかということの究明を行った。

『全知識学の基礎』において「障害」は元来、我々の内に表象が生じるという事態を説明するために導出される概念である。そこ報告者はまず、こうした事態を、いかに（フィヒテがカントを乗り越えようとした一因でもある）「物自体」の想定を抜きにして説明するか、という観点から「障害」の果たす役割を検討した。その結果として「障害」は、フィヒテが『全知識学の基礎』において重要な位置を与えていた自我、すなわち「絶対我」を論じる際に掲げる理想（自我は何にも規定されることなく、いっさいの実在性を満たす）の挫折、つまり自己ならざるものによって規定される有限な経験的意識という現実を認識させる契機であることが明らかになった。しかし、「障害」概念のもつ第二の側面について考察するなかで、こうした理想がけって空虚に掲げられた概念に尽きるのではないという点もまた明らかになった。現に存する諸事物との関係において我々の意識はどこまでも有限であるが、こうした有限性を直視し、自らの有限性を克服しようと絶えず努力するよう自らを自己自身で規定し得る点、つまり「自己自身を限局せよ」という課題を自ら引き受け、これを遂行し得る点において、我々にはなお無限を目指し続ける余地が残されている。

以上より報告者は、「障害」が、一面においては、自我の有限性を我々に突きつけるものであるが、他面においては、こうした有限性の中に存する無限性に、すなわち、あるべき自己を絶えず目指して努力し得る我々の可能性に気付かせる契機としての意義をもまたあわせもつことを明らかにし、こうした観点からイェナ期のフィヒテの思想において「障害」概念の内実と、この概念が想定される意義とを指摘した。

(2) 2022 年度：「絶対我」概念の研究

報告者は 2020 年度以来、「自我」概念について、〈(自らの) 存在の規定の働き〉という観点から、イェナ期のフィヒテに依拠し検討を行ってきた。本年度は、この時期のフィヒテの思想において「原理」として位置づけられる、「絶対我」という概念に着目し、これがフィヒテの思想体系において果たす役割を検討した。報告者はかねてより、理論的文脈と実践的文脈とでそれぞれ形成される、自我と非我との相互規定的な連関構造に定位し、〈自己規定の円環構造〉という観点から「自我」概念を究明すべく研究を遂行してきたが、今回は、この自己規定の基盤を与える「絶対我」概念について、次の観点から考察を行った。

まず、この「絶対我」概念が、理論的文脈と実践的文脈とで形成される自己規定の事態を説明する原理として機能する点である。理論的文脈においては「絶対我」は、非我により自らの存在を規定されたものとして成立するところの、経験的意識一般の可能性を説明する、いわば〈説明原理〉としての役割を果たす。他方、実践的文脈においては、今度は（理論的文脈において、自らを規定する当のものであった）非我をさらに規定するものとして自らを規定すること（努力）の可能性を提示する〈理念〉としての役割を果たす。上述の通り、報告者は自我の内実を、理論的自己規定と実践的自己規定とが織り成す円環構造から論じることを試みてきたが、こうした試みとの連関で言えば、件の「絶対我」は、ひとつには〈説明原理〉として、いまひとつには〈理

念)として、この円環構造を根拠づける概念であることが示唆される。

この点において、「絶対我」を〈フィクショナルな概念〉として解釈する立場もある (cf. Brezeale, “Fichte’s Philosophical Fictions” : 2002)。たしかに、経験的意識の可能性を根拠づける〈説明原理〉として位置づけられる以上、「絶対我」そのものが経験的な意識の内に現れると想定することはできず、この点において「絶対我」という概念を〈フィクショナルな性格をもつ概念〉として解釈する見立ては妥当である。すると、知識学も、このような〈フィクショナルな原理〉から形成される〈フィクショナルな思想体系〉と解釈したくなるが、ここに錯綜した問題がある。フィヒテは一方で、知識学はたんなるフィクショナルな体系ではなく、むしろ「実在的な思考の体系」であるとも論じる。この点を重視する論者 (cf. Crowe, “Fichte’s Fictions Revisited” : 2008) は、「絶対我」概念に、あるいは (より慎重に言えば) この概念が指示するところに実在的な内実を見出す解釈を提示する。知識学を「実在的な思考の体系」とするフィヒテの主張と、知識学を〈フィクショナルな原理〉に基づく思想体系とする解釈とは、いかにして整合性を保ち得るのか。また、フィクショナルな原理に基づく、「実在的な思考の体系」は、いかなる点において「実在的」でもあり得るのか。この点について、これまでの研究では決定的な結論が出されてこなかった。加えて、この問題をめぐる議論は、主に理論的文脈に焦点が当てられており、実践的文脈をも包括した整合的な解釈の方向性は示されてこなかった。

そこで報告者は、知識学に従事する哲学者自身が、その取り組みに際し、「知的直観」という特別な実践を求められる点に着眼した。これは、哲学者自身が自らの意識において、「自我」の動的本性を捉える、あるいは、知識学に取り組む者に対し、知識学の原理である、こうした「自我」の本性を示唆するために設けられる。「端的かつ無条件的な自己定立」という事柄は、自我の動的本性を示すものとして、「絶対我」概念の内実を指示する。しかし、先述の通り、「絶対我」において論じられる事柄は、経験的意識の中で生じることはない。それにもかかわらず、「知的直観」という実践を遂行する哲学者は、この「絶対我」の本性を自らの意識の中で、いわば追体験するのである。ここにおいて哲学者は、理論的文脈においては、経験的意識一般の説明原理として機能する「絶対我」の活動性のリアリティを目の当たりにする。このことは同時に、実践的文脈においては、自らが被る制限性を克服すべく努力することの可能性を示唆する理念、すなわち「絶対我」において掲げられていた自由のリアリティを我々に開示する。このような一連の議論に基づき、報告者は、フィクショナルな原理に基づく知識学がいかにして、同時に実在的な体系であり得るのかを明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 尾崎賛美	4. 巻 9
2. 論文標題 フィヒテの自己定立論とカントの自己意識論	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『WASEDA RILAS JOURNAL』	6. 最初と最後の頁 21-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 尾崎賛美	4. 巻 23
2. 論文標題 カントにおける自己認識論 自己意識論との連関から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『日本カント研究』	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 尾崎賛美	4. 巻 74
2. 論文標題 「フィヒテ『全知識学の基礎』における「障害」概念の再検討 自我の自己限局への「課題」として」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『哲学』	6. 最初と最後の頁 158-170
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 尾崎賛美	4. 巻 68
2. 論文標題 「イエナ期「知識学」の原理としてのフィクションと実在性 「絶対我」概念の再検討」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『早稲田大学大学院 文学研究科紀要』	6. 最初と最後の頁 41-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 尾崎賛美
2. 発表標題 「フィヒテ『全知識学の基礎』における「障害Anstoss」概念の再検討 自我の理論的自己規定への契機として 」
3. 学会等名 日本哲学会 第1回秋季大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 尾崎賛美
2. 発表標題 「イエナ期「知識学」の原理としてのフィクションと実在性 「絶対我」概念の再検討 」
3. 学会等名 早稲田大学哲学会春季研究発表会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------